

知求会ニュース

2019年9月

第71号

◎ 放送大学栃木学習センター面接授業

1. 環境政治学入門 2019年11月30日（土）1時限～4時限
2019年12月07日（土）1時限～4時限
高橋若菜先生（国際学部准教授）
2. 地域社会で「生き生きと」生きる 2019年10月19日（土）・20日（日）1時限～4時限
中村祐司先生（地域デザイン科学部教授）
3. 劇詩『賢者ナータン』と現代 2019年11月09日（土）・10日（日）1時限～4時限
渡邊直樹先生（国際学部名誉教授）
4. 多言語コミュニケーション 2019年11月16日（土）・17日（日）1時限～4時限
吉田一彦先生（国際学部教授）

研究室訪問 51 第9号から国際学研究科に関する内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

「自己と他者の文化人類学」

国際学部 金子 亜美

2019年度前期の授業期間が終わりました。今回「研究室訪問」に寄稿させていただく機会を得ましたので、今学期の多文化共生基礎C（文化人類学）を振り返りながら、文化人類学についてお話しさせていただきます。

文化人類学は、フィールドワークをして民族誌を書く学問です。漠然とした言い方なのは、扱われる対象によって定義ができないからです。地域はトロブリアンド諸島から極北地域まで、最近では宇宙にさえ広がっています。時代も同時代だけでなく、有史以前から戦時中、シンギュラリティの未来まで含みうるでしょう。また扱われる単位も、「民族」からカースト、ネーション、宗教共同体、職業集団、ジェンダー、組織、制度、そして動物、自然、超自然までと多種多様です。さらに言えば、文化人類学は今日までに細分化を繰り返し、経済人類学や政治人類学、認知人類学に医療人類学など、それぞれの理論的観点を有した下位分野を増殖させてきました。そのため、文化人類学の入門的な授業を行う場合にやりようが複数あるのはほぼ確実です。

私が授業の受講者にもっとも求めたのは、これまでの自己について考えること、そしてそれを変容させることでした。それは、私自身が考える文化人類学的なものの方や考え方と大いに関係があります。

北米総合人類学の創始者ボアズ(1858-1942)は、「自らの文化を見るときほど、文化めがねを外すのが難しいことはない」と述べました。私たちの認識は、私たちが育ってきた環境や言語、人間関係などによって方向付けられています。この立場に従えば、文化人類学

者自身も、真に客観的な仕方世界にアクセスすることなどできないということになります。それは、フィールドワークをして民族誌を書くという営為が不可能であることを意味するのでしょうか。

文化人類学では、認識の限界を認識した上で、それでも他者理解を試み続けます。どのようにしてでしょうか。エヴァンズ＝プリチャード(1902-1973)はアザンデやヌアーの人々とともに暮らし、現地の言葉を学び、彼らが身近な人々と何を話すのか、何に熱中するのを見つめました。それを長期間続けると、自分自身の認識が変化し、研究者にとってではなく、現地の人々にとって何が問題なのかを考えるようになります。以前は見えなかったものが見えるようになることさえあります。他者の認識を理解しようとすることで、自己の認識が解体されるのです。その作業を繰り返す文化人類学者の姿は、まるでアマゾンアのシャーマンが、複数の動物の観点を経験したあとに戻ってくるかのようです。ロイ・ワグナー(1938-2018)が言うように、文化人類学者は他者を研究しているようで、実は他者との出会いによって変わりゆく自己をも徹底的に研究しているのです。

ベイトソン(1904-1980)に倣って、他者の認識を想像する思考実験をしてみましょう。あなたは火星人で、今、空から何らかの物体が星になって降ってきたとします。それは、地球人が言うところのカニです。あなたは火星人間なので、カニもエビも見ただけではありません。しかし観察の結果、これが生物の死骸であるという結論に至ります。では、いかにしてその結論に至るのでしょうか。

授業でこの思考実験をしたとき、こんな答えが出ました。解剖する。臓器があるかを調べる。火星にいる類似した物体と比較する。燃やしてみる。どれもいい答えです。実はこの思考実験でわかるのは、「生物」と言うときにあなたが想定している条件です。問題となっているのは、私たち自身の生物概念だったのです。実験に登場した他者が実在の存在かどうかは、ここでは重要ではありません。重要なのは、他者理解と自己理解のプロセスが表裏一体であるという事実です。

他者同士の出会いについての、レヴィ＝ストロース(1908-2009)お気に入りの逸話があります。大航海時代に、大アンティル諸島でスペイン人征服者とアメリカ先住民が接触したとき、いずれも相手が自分と同じ人間であるかどうか確信をもつことができませんでした。そこでスペイン人は、先住民が魂をもっているか調べようとしたのに対し、アメリカ先住民は、スペイン人捕虜を水に沈めてその死体が腐敗するかどうかを調べたというのです。

この逸話も、異なる二つの「人間」の条件を示しています。ヴィヴェイロス・デ・カストロ(1951-)が論じるように、スペイン人にとって人間の条件とは、信仰や法や王に従うことのできる「精神」をもつことだったのに対し、アメリカ先住民にとってそれは、死んだら腐敗する同じ「身体」をもつことだったのです。人間の条件が異なれば、「自然」の定義もまた異なります。近代ヨーロッパ思想が身体を「自然」の領域に属すものとみなし、それゆえに先住民が身体をもっているかどうかを疑わなかったのに対し、アメリカ先住民思想は精神を「自然」の領域に属すものとみなし、それゆえにスペイン人が精神をもって

いることを疑わなかったのです。このように、異なる人々の認識論と存在論を往来することで、文化人類学は、言葉ともの、表象と現実、精神と身体、文化と自然のあいだに設けられてきた境界そのものを曖昧にします。

授業でさまざまな認識論と存在論を通り過ぎ、自分のものの見方が変化したというコメントをたくさんいただきました。そのことからわかるのは、私たちは、認識の限界にもかかわらず、私たち自身の認識が必ずしも及ばない存在からの接触に対してつねに自己を開いているということです。コロンブスがアジアを求めてアメリカを発見したように、認識の外にも世界は広がっているかもしれませんし、そうではないかもしれません。いずれにせよ、人は自己の既存の範疇で物事を経験しがちです。その限界を超えていくために、大学での学びがあります。古代ギリシア時代以来、今ここにはないものについて思考し、表象する力が、人間に特異なものとされてきました。それは、認識の限界を超えた先にも言えます。想定をはるかに超える他者性に自らを開いておくこと、それによって自己を変容させ、変容した自己にすら安住せず思考を続けることは、不確実な「多文化共生」の時代を生きる全ての人に、多くの学びをもたらす教養であろうと私は考えています。

(2019年8月11日原稿受理)

博士録 50 第22号から今後の博士誕生を鑑み、新コーナーを設けました。

知究人 35 第9号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー(ちきゅうびと)を設けました。

海外だより 29 第27号から国際学研究科、国際学部出身の海外在住者からの寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

「アメリカでの子育て～就学前教育」

肥留川 紀子

私は現在、夫の転勤に伴い、ニューヨーク州の郊外で生活をしています。私の娘は、1歳半から3歳半まで日本の保育園に通い、3歳半から5歳までアメリカのプレスクールに通いました。アメリカのプレスクールの「就学前教育」を受けて感じた、日本の教育との違いについて、報告をします。

アメリカでは先生も親も「褒め上手」です。娘の先生達は、毎日娘にハグをして、「I love you」と伝えてくれます。私が、面談の時に「娘の直したほうが良い所はどこですか」と聞くと、先生達から「直したほうが良い所なんて全くないわ。最高に素晴らしくて、本当にいい子よ。先生たちは、あなたのことが大好きよ。」と娘に伝えてほしいと言われました。娘のクラスメートの親たちも、登下校中に出会うと必ず話しかけてくれて、洋服や持ち物をほめてくれます。先生や周りの大人達から愛されていること、関心を持たれていること

をストレートに受け取れるので、アメリカに来てから、娘の自己肯定感が高まったように感じます。

私が好きな娘の園の教育方針は、「子どもたちが自分たちのやりたいことを見つけて、やりたい方法で行えるように、先生たちが促してくれること」です。面談の時に先生から、娘の良い点として、「室内遊びをするときは、特定の友達と遊ぶのではなく、自分のやりたい遊びを選んで、行っている。」と言われました。私は、娘の社会性が足りないのではないかと心配しましたが、先生達は娘のその行動がとても大切な資質だと褒めてくれました。また、娘はアメリカに来てから、工作が大好きになりました。日本の保育園の工作は、完成形が決まっていて、出来上がった作品の見栄えがとてもよかったです。一方、アメリカの園では、材料もやり方も自分で決めて作るので、何とも言えない、オリジナリティあふれる作品ができます。娘はよく、「いいんだよ!自分の好きなようにやっていいんだよ!」と私に言います。先生方から「大人だって間違えることもあるし、失敗を気にせずに、自分の好きなように作っていいのよ。」と励ましてもらったそうです。自分のやりたいことや自分のやり方を尊重してもらえることで、娘の自己実現力が育まれてきました。

最も驚いたことは、就学前教育の時から、「自分の意見をきちんと伝える教育を受けていること」です。娘の4歳のクラスには、「**Show and Tell**」という時間があります。毎週、決まったアルファベットで始まるモノを持っていき、一人ずつ順番に、クラスみんなに説明をします。子どもたちは、お気に入りのおもちゃなどを持ってきて、「誰にもらったのか」、「どのような思い出があるのか」等、自分の好きな話をするそうです。発表をする人は、前に用意された椅子に座ります。他の生徒は、床に座って説明を聞きます。説明が終わると、聞いていた生徒達は、手を挙げて、質問をしたり、感想を述べたりするそうです。娘は、この時間が大好きで、毎週、「何を持っていくか」、「どのように説明をするか」等、楽しみに準備をしていました。就学前から、人前で話すプレゼンテーションの練習をすることにとっても驚きました。また、娘は、英語がまだ流暢に話せない時から、「**because**」とあって必ず理由を言うようにしています。子どもでも、きちんと自分の意思とその理由を伝えることを重要視するアメリカの教育方針は見習いたいです。

日本とアメリカで就学前教育を受けて、大きな違いがあることを感じました。日本の保育園では、「ルールにそって集団生活を送れるようになること」、「お友達との関わりの中で社会性を身に着けること」、「礼儀やマナー」等について、しっかりと教わりました。アメリカでは、「自分が愛される存在であること」、「各自の個性を見つけて良いところを伸ばすこと」、「自分の意見をきちんと伝えること」を教わりました。将来、様々な国の人たちと関わっていくためには、自分の言いたいことを明確に伝え、相手を説得する能力が必要になってきます。また、AIの発展により、仕事する際には、独自性や創造性がますます求められるようになることでしょう。娘の人間形成の土台を作る幼児期に、自分のやりたいことを見つけ、そのやり方を遊びの中から伸ばしていくというアメリカで受けた教育は、とても貴重な経験になりました。娘は今秋から、公立の小学校に通います。今後

も、アメリカの教育の良い点を学んでいきたいです。

(国際学研究科国際社会研究専攻 第2期修了生)

(2019年8月18日原稿受理)

海外留学今昔 28 第35号から国際学部出身者および在学者を中心とした海外留学体験の寄稿をお願いしたコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**海外留学経験者** および**海外留学中の在学者の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

「カンボジア留学体験記」

与那覇 利香

私は2018年9月から2019年7月までカンボジアの王立プノンペン大学外国語学部国際関係学科に留学していました。カンボジアで、英語を使って国際関係を学んでいたという、大抵の人に驚かれますが、私が所属していたクラスの学生たちは英語が堪能で、国際関係に関する知識量も日本の学生より遥かに多く、最初は授業についていくのが大変でした。

私の留学生活の中で、最も好きだったものの1つが自分の住んでいたアパートと、その周辺地域のご近所さんたちです。留学後期から住み始めたそのアパートでは、水シャワーどころかシャワー口から水が出ないので、桶に水をためて浴びる桶シャワー、トイレは現代の日本ではなかなか見られない汲み取り式トイレ、洗濯機は水不足で動かないので洗濯物は手洗い、そして毎日アパートの通りで街の人が鶏をつぶしている前を歩いて学校へ行く、というような生活をしていました。プノンペンには、洗濯清掃などのサービスが付いた外国人用のアパートも多くありましたが、東南アジアでの生活を体験したいという想いでカンボジアに来ていたため、ここでの生活は私にとってより刺激的で楽しいものでした。

このアパートでは、断水や停電は日常茶飯事で、日本に住んでいたら絶対体験しないようなことが、よく起こりました。特に4月の1年で1番気温が高い季節には、毎日のように停電が起こりとても暑くて体調管理が大変だったことを覚えています。しかし、そんな中でもこのアパートでは、毎日明るく楽しんで生活できていました。停電で暑いときは、部屋のベランダに出てお隣さんと話し込んだり、いつもは気づけない星や月と一緒に眺めたりしていました。停電によって、近所の方と関わる機会やこの状況を切り抜けるために助け合う機会が自然とうまれました。他にも、暑くてやる気が出ないので、1人で空を見上げながらぼーっとしたり、考え事をする時間もよくありました。これらは一見無駄な時間で、貴重な留学の時間をこのように使っているのかという想いもありましたが、今振り返ってみるとこの時間はとても大切だったように感じます。何もしない時間を作ること、自分と向き合う時間を作ること、特に日本にいると忘れがちですが、重要なことです。カンボジアでの生活は、人生を豊かにするためのヒントをたくさん得たように感じています。

この経験を大切に、今後の自分の人生をより豊かにしていきたいです。

(国際学部 国際社会学科 第4年次在校生)

(2019年8月19日原稿受理)

「カンボジア留学体験記」

小山 彩花

私は、2018年9月から2019年7月までカンボジアにある王立プノンペン大学に留学していました。高校生の時にボランティア活動やホームステイプログラムでカンボジアを訪れたことがきっかけで、カンボジアの社会問題に興味を持ちました。観光だけでは知ることが出来ない面をもっと知りたいと思い、王立プノンペン大学を留学先として選びました。カンボジアに対して、おそらく多くの方が「大量虐殺、内戦、地雷」などというマイナスなイメージを持っているのではないのでしょうか。そんなマイナスのイメージを払拭出来る留学体験を紹介出来たらと思います。

一番印象に残っているのは、大学の授業初日です。大学は4年間クラス替え無しのクラス制で、私は2年生のクラスに入りました。私以外はクメール語が話せて顔見知りという状況に入ることになり、前日から緊張していました。授業初日の日、クラスにいきなり入ってきた外国人の私に誰も話しかけてはくれませんでした。私を凝視してクメール語で何やら話していました。クラスメイト全員からの好奇心丸出しの視線に、逃げ出したい気持ちでいっぱいでした。授業の合間の朝ごはん休憩の時間になると、急に一人の男の子がチョコレートをくれ、話しかけてくれました。話しかけてくれた彼は優しい笑顔で、私もつられて笑顔になりました。そのときはじめて、ずっと私の顔が強張っていたことに気付きました。そんな顔をされていたら話しかけにくかったはずなのに、「チョコレート」という話しかける口実を必死に探してくれました。マイノリティだと背負い込みすぎているせいで、私から話しかけにくい口実を作っていたのだと反省しました。彼のお陰でクラスメイトと一緒に朝ごはんを食べ、初日から馴染むことが出来ました。日に日に慣れてくると、私がいても構わずクメール語で会話をされ、また孤独の日々が続きました。クラスメイトともっと話すには彼らの母語を覚えるしかないと感じ、クメール語を覚えるきっかけになりました。

クメール語を覚えたいと思ったもう1つのきっかけは留学初日の夜です。大学の授業は全て英語で行われていましたが、日常生活ではクメール語が必要不可欠でした。大学は観光地から離れているため、店では英語はほとんど通じません。何とかかなと思っていました私は、挨拶程度だけを覚えてカンボジアに到着し、留学初日でその甘さを思い知ることになりました。近所の屋台で夜ご飯を買おうと思っていましたが、「これください」ですら何というのかを知らずでした。必死に指差しで欲しいと訴える私に対し、なにかクメール語で伝えている店主さん。いくら待っても指をさしても何も出てこないで、その日は

諦めて帰りました。ただ夜ご飯を買いたかっただけなのに近所で買い物すら出来ないのは、なんとも惨めでした。

その後クメール語の授業や日常生活で簡単なクメール語をコツコツ覚えていきました。クラスメイトや店の人達は本当に優しく、覚えてたの拙いクメール語でも、なんとか聞き取ろうとしてくれました。ちょっと話せる単語が増えると一緒に喜んでくれ、更に新しい単語を教えてください。最後にクメール語で頑張るという意味の言葉「SUSU」を紹介します。これは私が一番好きな言葉です。ホームステイプログラムで出会った子に教わった言葉で、今も大切にしています。会話中に私がクメール語を思い出せないとき、クラスメイトはいつも「SUSU」と言ってくれました。クメール語の代わりに英語で話すのではなく、思い出せるまで応援してくれる彼らの優しさが詰まった言葉です。

留学初日から最後までカンボジア人のあたたかさに触れ続けた留學生活でした。彼らのお陰で大きな事故や病気とは無縁の生活でした。日本で私の留學をサポートして下さった宇都宮大学の皆様、そして応援してくれた両親や友人には深く感謝申し上げます。

(国際学部 国際学科 第3年次在校生)

(2019年8月25日原稿受理)

学生サロン 17 知求会ニュース第41号より現役学部生によるコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**現役学部生の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

「グローバル・ガバナンス学会での発表報告」

宇都宮大学国際平和と司法研究会 (Utsunomiya International Peace and Justice)

井手之上 健太

UIPJ(宇都宮国際平和と司法研究会)の副代表(2018)を務めていた国際学部3年の井手之上健太です。私は、同年度のメンバーである福原玲於茄、横山友輝とともに、今年度の5月に神戸大学で開催された第12回グローバル・ガバナンス学会に参加しました。同学会では、初めて学部生・院生によるポスターセッションが設けられ、私たちは今回学部生の部で発表をする機会をいただきました。発表テーマは、「文民の保護の規範性に関する考察—MONUSCOにおける遵守ギャップに着目して—」です。このテーマは、昨年度UIPJが開催した公開シンポジウムで、国際連合コンゴ民主共和国ミッション(MONUSCO)に焦点を当てて扱った「文民の保護とは何か?」という題目を、グローバル・ガバナンスの視点から捉えなおし、より理論的に研究したものになります。具体的には、1999年にシエラレオネに展開する国連平和維持活動において、初めて任務に加えられた「文民の保護」が、今日国連安全保障理事会の決議などを通して国際社会で広く認知され、その必要性が訴えられているにもかかわらず、現場ではそれが果たされていないというギャップを指摘しまし

た。その上で、現場での不遵守が、国際社会において規範として成立している文民の保護の“規範性”そのものに揺らぎを生じさせてしまっているのではないかという問題提起を掲げた研究になります。学会に所属する先生方から貴重なご指摘及びアドバイスをいただきましたとともに、幸運なことに、上記の研究で学部生の部の奨励賞をいただくことができました。また、他大学から参加した学部生・院生などの同年代の方との交流から刺激を受け、今後の学習への意欲も高まりました。

本学会での発表を通して、普段の大学生活では体験することのできない貴重な経験をすることができました。諸先生方からいただいた知見を自身の今後の学習に生かすだけでなく、UIPJの後輩たちに共有することで、研究会にも還元し、活動をより活発にしていけたらなと思います。

最後にこの場を借りて、研究指導をしていただいた松村史紀先生、藤井広重先生をはじめとした諸先生方はもちろんのこと、準備から当日の発表に至るまで一緒に活動してきた2人の仲間に、そして今回このような形で発表報告の機会を下さった知求会の皆様に感謝の意を伝えたいと思います。ありがとうございました。

(国際学部 国際学科 第3年次在校生)

(2019年7月17日原稿受理)

キャリア指南13 現役学部生に向けた企画として、宇都宮大学全学部から国際機関をはじめ、NGO・NPOや企業などで活躍する先輩方に執筆していただくコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**キャリア指南にふさわしい卒業生の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

フォーラム 2019年の長月を迎えて、皆様忙しいことと思います。(原稿集めに苦労しています。)

「宇都宮大学 3C 基金と私」

平井 雅世

こんにちは！2004年3月に国際学研究科国際社会研究専攻を修了した平井雅世です。私は、現在、宇都宮大学 3C 基金事務局でフェンドレーザーとして勤務しています。本基金は、旧基金をベースに、学生支援や教育研究活動支援、教育環境整備の充実を目的に、平成29年度に宇都宮大学 3C 基金と改められました。3Cとは、宇大スピリットを示す“Challenge、Change、Contribution”の頭文字をとったものです。宇都宮大学3C基金設立後は、同窓生、保護者、地域や企業の皆様より多くのご支援をいただき、奨学金の給付や海外留学・国際交流等を推進する教育研究活動、キャンパス環境の整備への支援を積極的に進めることができるようになりました。これまで、ご協力、ご支援くださいました国際学部の同窓生の皆さまをはじめ関係者の皆様には厚く御礼申し上げます。

さて本学では、旧図書館書庫（大谷石蔵）の改装を中心としたヒストリカルゾーンを整

備する予定です。これは、1924年に宇都宮高等農林時代に講堂として建築され2009年に改築された“峰が丘講堂”と“フランス式、イギリス式、日本式”の庭園を遊歩道で有機的につないで、その歴史的でかつ優れた景観を後世に残せるよう、その周辺を含めてヒストリカルゾーンとして整備し、3年後の2022年の完成を目指します。本年は宇都宮大学創立70周年を迎えることから、70周年事業の一つとして、ヒストリカルゾーン整備事業のコンセプトが、11月23日の70周年記念セレモニーにおいて発表される予定です。

この整備のコンセプトは、①大学周辺に居住する方々にとっては非日常を感じ心に潤いをもたらす空間、②卒業生にとっては学生時代に瞬時に戻れる空間、③在学生にとっては大学の研究成果に触れ、新たな知性が育まれる空間、④将来世代にとっては、この大学に入学したくなる雰囲気醸し出す空間という多様性を有する空間の創造です。このコンセプトに基づいて真心をもって整備することによって、宇都宮大学がより多くの方々の身近な存在となり、もっと愛される大学を目指します。

3C基金設立から創立70周年を迎える本年までの3年間で3億円の寄附を目標にしてきましたが、現在(2019年8月)、約2億9千万円のご支援をいただくことができ、皆様方の宇都宮大学への深い愛情を感じるとともに、そのお気持ちに少しでもお応えしていかなくては！と決意を新たにしています。

詳細は以下のアドレスへアクセスしてください。これまでの事業報告も掲載しています。

http://www.utsunomiya-u.ac.jp/fund/3c_kikin.php

ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

(国際学研究科 国際社会研究専攻 第4期修了生)

(2019年8月22日原稿受理)

お知らせ 再掲

2019年11月23日(土)の午前中に宇都宮大学創立70周年記念イベントと企画展「宇都宮大学の歴史」が開催されます。午後から第5回宇都宮大学ホームカミングデーが各学部で開催されます。ぜひ、多くの同窓生の参集をお待ちしています。本年の手帳に予定を入れておいてください。よろしくお願いいたします。

東南アジア支部だより

第63号から、タイ在住の**大畑美優紀**さん(国際学部社会学科第1期生・国際学研究科国際社会研究専攻第1期期生)が発起人となり、国際学部同窓会および大学院国際学研究科同窓会の東南アジア支部としてニュースレターを創刊しました。2019年4月から、年4回から**年2回発行(4月1日、9月1日)**の変更になりました。第8号の主な内容は以下の通りです。1. ご挨拶 2. 懇談会報告 3. リレーインタビュー 當間里絵さん 4. 連載コーナー 狙えインスタ映え!? 第4回アジア取材雑記 東南アジアを襲う!? “隣人”の食欲 谷澤壮一郎 / No.8 タイの昨今ーお小遣いは必需品ー大畑美優紀 / トコロ変

わればザ☆談会 / 今旬のイチマイ 第四回 ともに感じる東南アジア 田邊知成
東南アジア地域在住の同窓生は積極的に声を掛け合っていたりすることを祈念しています。

EU 支部だより

第 38 号からイタリア在住の松原真実子さんによる知求会 EU 支部だより「Newsreel World」を発行してきました。今回の 31 号の内容は、1 イタリア 観光名所「スペイン広場」、座ったら多額の罰金 ローマ 2 イタリア クルーズ船が小型船に衝突、4 人軽傷「まるでパニック映画」 ベネチア 3 EU 支部だより ーオーバーツーリズムーです。配信方法は、画像が掲載されているために別便で配信します。ファイル容量が大きいことで、ニュースレターが受信できない場合にはその状況をお知らせください。

編集者のひとりごと

- 本年 4 月 15 日から縁あって、栃木市教育委員会生涯学習部文化課で臨時職員として遺跡発掘調査員（学芸員）の職を得ました。定年後（編集者の場合 65 歳）に働く機会を得たことは経済的側面だけでなく、精神的側面で大いに自己形成に役立っています。近年、「人生 100 年」が叫ばれていますが、実態は「生涯現役」を貫くことは至難の業ではないでしょうか。編集者の場合、東京から帰省後宇都宮以外の勤務経験はなく、発掘現場まで（宇都宮から約 22km）自動車通勤をしています。いま通勤時間をどのように活用するかが課題となっています。「時は金なり」といいますが、この誌面編集も従来の様に時間をつぎ込むことができない状況です。ですから、頁数が少なくなりました。
- 編集者の専門はデザイン史なのですが、遺跡発掘分野の「考古学」は専門外ということもあり初心者の立場で現場に携わっています。編集者が担当している現場は中世山城であった「西方城址」で、標高約 220m ということもあり、体力が求められるところです。登りは約 30 分かかります。戸外での仕事ということで、健康維持には大いに貢献しています。職場は 60 代・70 代を中心にした編成になっています。さまざまな人生経験をもった方々との会話を楽しみながら、困難な課題に取り組んでいます。
- 「人生 100 年」時代に必要な公共政策は何でしょうか？「公助・民助・自助」ということばがあるとおり、「公助」だけに頼るのではなく「民助」の知恵や実行力、そして「自助」の意識改革と行動力が大いに必要なことと思います。

編集後記：2010 年 4 月 26 日から **知求会ニュースのバックナンバー**は **国際学部同窓会 HP** (<http://www.afis.jp>) で見られるようになっています。

同窓会会員の皆様へのお願い：**住所、勤務先および携帯電話番号、メールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。**chikyukai@freeml.com